

第14回東邦大学生命倫理シンポジウム提題

「健康」なんて関係ねえ

土屋 貴志

(大阪市立大学)

自己紹介

1961年生まれ。1990年 慶応義塾大学大学院文学研究科哲学専攻（倫理学分野）博士課程単位取得満期退学

1989-1994年 杉野女子大学・横浜国立大学・千葉大学などで非常勤講師。1994年より大阪市立大学文学部教員（現在准教授。哲学教室所属、倫理学担当）。2002-2019年 医学部「医療倫理学」兼担、2017年- 大学院共通科目「研究倫理」共担、2008-2016年 看護学研究科倫理審査委員、2008-2017年 文学研究科研究倫理審査委員。現在、人権問題研究センター兼任研究員、同研究倫理審査委員長

2005-2013年「薬害イレッサ西日本訴訟を支援する会」共同世話人、2012-13年度および2015-16年度 三田市人権のまちづくり推進委員長

専門：倫理学（道徳哲学。とくに、倫理学基礎論、医療倫理学、人権論、道徳教育論）

申し立てと乗り越えの葛藤

病気になった人、障害を負った人、事故や災害に遭った人、事件に巻き込まれた人など、「しんどい人」すべてにあてはまるが、

- しんどいが、しんどいことを意識していない間は、一時的に解放されている
- しんどさばかり意識していると、しんどさを乗り越えて前へ進むことができない
- でも、しんどさは、申し立てなければ、他者には理解してもらえない
- 申し立てることで、しんどさを意識し、しんどさに留まってしまうことになる

1. 自分のこと

2016年春～夏、初めての長期入院 (1)

- 4月2日(土) 自転車で帰宅中、左に傾くのでおかしいと思い、休日の当番病院を紹介してもらおうと消防に電話したら「救急車を出したほうがいい」と言われ、脳外科病院に搬送され、そのまま入院
- ★意識は全く途切れず、身体の変調を「あれよあれよ」と眺めていた
- 4月3日(日) 回復室から個室に移る
- 4月22日(金) 胃ろう (PEG) 造設
- 4月28日(木) 回復期リハビリテーション病棟に移る (個室)
- 6月初め 経口摂取可能に。週に1回程度、一時帰宅を始める

4月6日（入院4日目）の様子



2021/7/03

左側椎骨動脈解離による延髄梗塞

→ フレンベルク（延髄外側）症候群 ★は現存する症状

★左半身が重く左に傾く = 左半身全体の脱力（右半身の半分しか力が出ない）

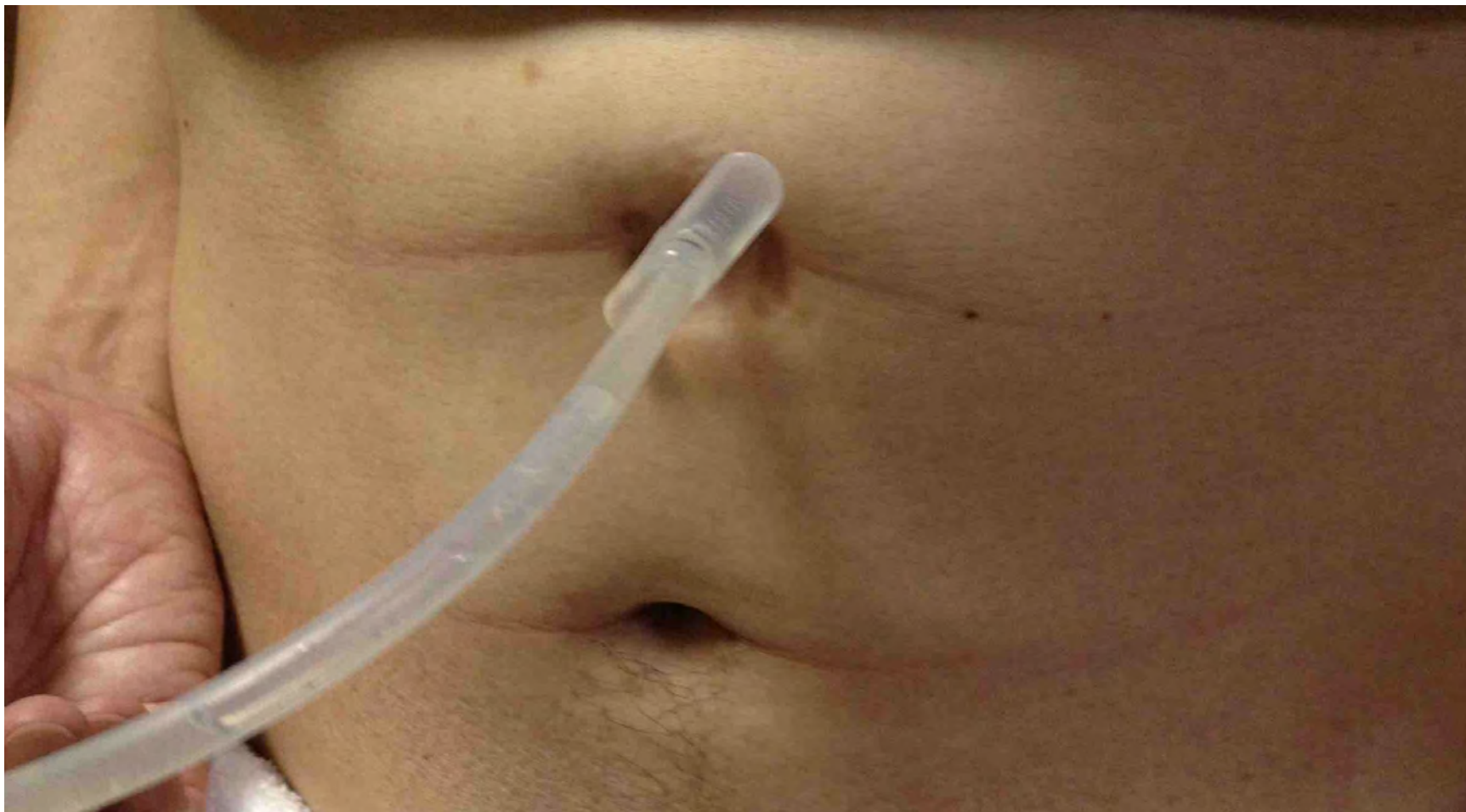
- 嚥下障害（飲み込めない→胃瘻造設→約2か月で回復→胃瘻抜去）
- しゃっくり（数日間続くことも→1か月ほどで消失）
- めまい（現在は消失）
- 嗄声（声がかすれる→現在はかなり克服）

★右脚の痺れ、左の頭部と顔面の痺れと痛み、左の眼や鼻の奥の痛み、左手の痺れ、右半身の痛覚と温度感覚の喪失、左半身の筋肉と首肩の凝り

★複視（眼球筋の失調により物がダブって見える）、左目のかすみ（退院後にヘルペス？による左眼角膜潰瘍に。現在は潰瘍は治癒するが、角膜の変形によりぼやける）

- 目を使うと症状が重くなる

胃ろうの外観 (バンパー・チューブ型)



2016年春～夏、初めての長期入院 (2)

- 6月23日(木) 朝昼夕 3食経口食に
- 6月24日(金) 3食通常食に。胃ろうからの注入なくなる
- 7月11日(月) 胃ろうチューブ抜去
- 7月中旬 右半身の痛覚と温度感覚が少し戻る
(むずむず感、くすぐったいような感覚)
- 7月29日(金) 退院
左半身の重み、左手と左顔面の痺れ、複視などは変わらず
- 8月1日(月) 復職 (すぐ夏休みに入ったが)

胃ろうの抜去跡（上、現在もほぼ同様）



できなくなかったこと

- スポーツ（自転車乗りを含む）：左に傾くのでバランスを取りづらい、目が見えにくい（声による指導は可能）
- 日曜大工、庭の手入れ：体がしんどい
- 観光、ショッピング：体がしんどいので楽しむ余裕がない
- 自動車の運転：動体視が多く周囲に留意するのがひどく疲れるのに途中で休めない
- 映画鑑賞（たぶん）：めまぐるしく動く画面や大音響に耐えられない
- 恋愛（たぶん）：体がしんどくて異性に関心を払う余裕がほとんどない

「左半身が重く左に傾く = 左半身全体の脱力（右半身の半分しか力が出ない）」とはどういう事態か

左半身に体重の半分以上のおもりを常時つけているようなもの

例えば、

- 大きめのショルダーバッグに、10kg入りの米袋を3つ入れ(計30kg)、左肩にかける
- その状態がずっと続く。決してバッグをおろせない

(実際には首から上も脱力しているので、複視、顔筋やまぶたが重い、頭が傾く、などもある)

体を支えること

- 常に左に傾こうとする体を支えなければならぬので、起きているときは、一瞬たりとも気を抜けない（労力の8割以上を体を支えるために使っている印象）
- だが、人と話したり、授業をしたり、本を読んだり、文章を書いたり、サッカー指導をしている間は、それに集中し、しんどさは一時的に忘れている
→ 終わった後にしんどさが戻る

「元気になってよかったですね！」

「元気になってよかったですね！」と声をかけられたら「全然だめです」と答えている

- 仕事は一応こなしているのですが、傍目には元の体に戻ったように見えるようだが、実際にはとてもしんどく、全然楽になっていない
- しんどいが、休んでいるわけにもいかない。ふらついて階段や駅のホームから落ちたりしないよう、足腰や体幹を毎日鍛えている
- そのおかげで仕事も通勤もなんとかできている
- 帰宅しては「今日も生きて帰ったな」と思う

症状があっても訓練すればできることはある

- 「再びできるようになった」からといって、症状がなくなったわけではない
- 「症状がなくなれば再びできるようになる」のは真。しかし「再びできるようになったから、症状がなくなっているはず」は偽
- 症状があっても不自由でも、訓練を積みば「できるようになる」ことはある（→パラリンピアン）
- 症状がなくなることはもう期待できない（急性ではなく慢性の症状）なら、症状がなくなるまで休んでいても仕方ないので、しんどいけれど訓練するしかない

2. 私にとって「健康」 とは？

「健康」に対する違和感

- 「健康」を自分のこととして語れるのは、健康な人だけ
- 「健康でない」ことを、いまの自分の状態とは異なる状態として「想像する」のは、健康な人だけ
- いま健康でなく、これから健康になる見込みもない、治らない病気の人や症状の固定した障害者は、「健康でない」ことしか「体験（体感として経験）」できない（健康は体験することではない）

「健康第一」「元気が一番」？

- 健康でなくなり、これから健康になる見込みもなくなってみると、「健康」は「自分のこと」ではありえない
= 他人事、よそごとであり、どうでもいいこと
- 「健康第一」「元気が一番」と言うのも健康な人だけ。健康になれない人にとってはどうしようもない
- 「国民は、健康な生活習慣の重要性に対する関心と理解を深め、生涯にわたって、自らの健康状態を自覚するとともに、健康の増進に努めなければならない」（健康増進法第二条）と言うのも、言われるのも、健康な人たちだけ

健康でないことを恐れるのは健康だから

- 痛みや不便さがひどければ、目の前のそれらに対処することで精一杯
= そのことを嘆いたりする暇はない
 - 心身の部分的な不調に気づくのは、全体的には調子が良いから
= 心身全体の調子が悪ければ、部分的な不調にも気づかないか、気づいてもかまっていられない
- 健康でないことを恐れるのは、いま健康だからこそ

この心身で生きるしかない

- どんな人であれ、いまはこの（体感されている）心身（心と身体）で生きるしかない
- 今後「健康」になれない人は、おそらくこれからもずっとこういう心身でやっていくしかない
- それは他に選択肢がない（どうしようもない、仕方がない）こと

「健康」は抽象的な概念

- 「健康とはどういうことか」という問いに対し、「これだ」という明確な回答は得られない

... 「幸福」という概念に似ている

体感的な言葉ではなく、抽象的な概念

- 「気持ちいい」「快い」ということは、「健康感」や「幸福感」として健康や幸福の構成要素ではあっても、健康や幸福そのものではない

健康はどのくらいよいことか？

- 「健康（＝病気や障害がないこと）はよい」
 - 「病気や障害がなくてよかった」と言いたいだけなのでは？
 - 「病気や障害はわるい」か？
- 「健康ならばよい」か？
 - 健康なだけで幸せなわけではない（健康だが不幸な人はたくさんいる）
 - 病気や障害があれば幸せになれないわけでもない（病気や障害があるが幸せな人もたくさんいる）

自明な真理？

- 「健康」という概念がそれ自体「よい」という意味を、「病気」や「障害」という概念がそれ自体「わるい」という意味を、もともと含んでいるなら、
- 「健康はよい」「病気や障害はわるい」というのは、「よいことはよい」「わるいことはわるい」という同語反復であり、（自明の真理ではあるが）何も言っていない

自明な真理？

- しかし、「健康」や「病気」や「障害」という言葉でくくられるさまざまな現象を、ひとつひとつ具体的に見ていくなれば、それらの現象は一概に「よい」とも「わるい」ともいえない
 - ひとつひとつの現象の中に、よい面もわるい面も含まれている
- 「健康はよい」「病気や障害はわるい」を同語反復や「分析的な言明」（述語の意味が元から主語の意味に含まれている言明）にしてはいけない

WHOによる健康の定義

「健康とは、身体的・精神的・社会的に完全に良好な状態であり、単に疾病や虚弱ではないということではない」
(WHO憲章, 1946)

- だが「完全に良好な状態」は定めようがない
- 健康であることは、そのままでは意識されない。病気になったり障害をもったりして初めて「健康でない」ことが意識される
- つまり健康とは、やはり「健康でない (病気だ、障害がある) わけではない」ということ、「病気や障害が全然ない」ということにすぎない

L. Nordenfelt (1995) による健康の定義

「人物Aが健康であるのは、とりまく環境が標準の状況にあつて、当人の最小限の幸福にとって必要かつ十分な条件となるような目標〔最重要目標〕を充足できる場合であり、かつ、その場合に限る」

(L. Nordenfelt, *On the Nature of Health*, 2nd ed., 1995. 『健康の本質』時空出版, 2003, 邦訳p.131)

- 機能障害 (impairment) や体調不良に苦しんでいるがリハビリやトレーニングによって「最重要目標」はなんとか達成できている人は「健康」なのか？
(パラリンピアンは「健康な障害者」?)

二種類の人々

以下のAとBの境界は「何をどのように『動かす』のか」によってそれぞれ異なるが、

A「意識しなくても頭や体を思うように動かせる」人々と

B「意識（努力）しなければ頭や体を思うように動かさない」人々

- 私の場合突然AからBになったが、最初から最後までAあるいはBの場合もあるし、BからAになることもあるだろう

- AとBは全く異なり、共通することがない

哲学的には「その人の体感は他の人にはわからない」のは自明の真理。わかるならば「他の人」ではない

- 同じ人でも、Aの時にB、Bの時にAの体感は、わからない

障害を負った本人は何を考えている？

- すべてが「仕方ない」
- 発症前にどう生活していたか、体感としては思い出せない
- いまの体でやっていく（いまの体の状態に適応していく）しかない
- 自分の体は、つねに、いまの体でしかない

= 発症によって失われたものを惜しんだり悔やんだりするのは観念的なこと。

体感的・実感的なことではない

現在の心身は過去や将来の心身とは異なる

- 人は体感される心身で生きている
- 将来、いまの病気が治ったり症状が消えたりしても、その心身はいまの心身とは別のもの
=いまの心身と将来の心身は異なる
- 病気になったり障害を負ったりする前の心身も、いまの心身とは別のもの
=いまの心身と過去の心身も異なる
- （「人格」としては同一でも）心身に基づく判断は、現在と過去と未来で異なりうる
→ 将来に関する判断（事前指示など）は、その時になってみると間違っている可能性が大

健康よりも生きていることが大事

- 私自身は、健康かどうかよりも、生きているかどうかというレベル
- 健康であることよりも、生きていることが大事
- 生きていなければ、健康も不健康もない
→ 「ぴんぴん生きてころりと死にたい」 = 「病人や障害者になり周囲に迷惑をかけるなら死んだほうがよい」 = 「健康でなければ生きていても仕方がない」というように、健康と生を同じ天秤にかけるのは間違い

生きていることで精一杯

- 本当に生命が脅かされているときは、それに対処することで精一杯
- 「しんどい」「苦しい」と思う余裕すらない
- 「しんどい」「苦しい」と思う余裕がある時があっても、「しんどい」「苦しい」状態のさなかでは、ひたすらしんどく、苦しいだけ
- それを「不運」とか思う余裕もない

不便・不運・不幸

- しんどい、苦しいことを客観視する余裕が出てくると、それを「不便」とか考える
- 不便であることを客観視する余裕が出てくると、それを「不運」とか考える
- 不運であることを客観視する余裕が出てくると、それを「不幸」とか考えることもある
- しかし、不運と考えたからといって、必ずしも不幸と考えるわけではない（不運は必ずしも不幸ではない）

「しんどい」「つらい」「苦しい」ならば「不幸」か？

- 「つらい」「しんどい」「苦しい」のは、そのまま、そうであると認めてよい
- しかし「つらい」「しんどい」「苦しい」ということと、「不幸せ」とか「生きるに値しない」とか「死んだほうがまし」とかいうことは、全く次元が違う
- 「つらい」「しんどい」「苦しい」のは、単にそうであるというだけのこと。それを表現したからといって、「不幸」ということにはならない

健康でなければ幸せでない？

- 「しんどいですか？」 「つらいですか？」 「苦しいですか？」 という問いには、「はい」と答えてよい
- 「楽になりたいですか？」 という問いにも、「はい」と答えてよい
- しかし、だからといって「やはり健康でなければ幸せではないですね？」 という問いには、すぐに答えてはいけない
 - ★健康な人でも、誰も簡単には答えられないはず
- まず、「あなたが言う『幸せ』って、どういうことですか？」 と反問すべき

生とは？死とは？

- 以上の問題を突き詰めていくと、そもそも生きていくこととはどういうことか、死ぬとはどういうことか、ということを考えなければならなくなる
- 生と死についての私の考えは、この場では説明しきれない。昨年、以下の文章を書いたので、関心があれば読んでください
- 「『輝き』としての生」

<http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/user/tsuchiya/gyoseki/etc/Lambarene201231.pdf>